

---

# 素晴らしきこの世界

リリィ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

素晴らしきこの世界

### 【Nコード】

N5397Z

### 【作者名】

リリイ

### 【あらすじ】

頭の残念なヘタレ魔王と男勝りな人類最強王女の血塗れラブコメディ。たまにシリアスが入るはず！でもほとんどシリアスなにそれ美味しいの？状態。

贈り物はよく考えて贈れ！

久々に魔王らしいことをしようと地上へと足を運んだ。  
そもそもその思いつきが間違いだったのだ。

煌びやかな室内にうんざりしながらも、逃げ惑う着飾った人間達に  
自然と笑みが零れる。

「貴方達の言葉では」今日は「かな？国王？」

「…何の用だ」

権力ある者が必死になる姿は実に滑稽だった。

「用など決まっているではないか。私も祝福しに来たのだよ。未来  
の国を継ぐ者の誕生を」

「くッ、貴様を呼んだ覚えなど無い！」

「おお、怖い。そんな大声では腹の子に響く。王妃も大変だな」

一歩、また一歩と魔王は玉座の二人に近づく。  
正しくは王妃に宿っている新しい命に。兵に囲まれようが、槍を構  
えられようがお構い無しに歩を進め魔王は笑みを浮かべた。

「受け取れ。私からの”祝福”だ」

ある大陸にとっても大きな国がありました。

その国はとても豊かで美しく平和な所です。

しかしある日、国の真ん中に大きな時計塔が建てられました。

民に時間を知らせるでも為ではなく、はたまた都の新しいシンボルでもありません。

その時計塔はひとりの王女を守る為の大きな鳥籠でした。

王女は産まれる前に魔王に恐ろしい呪いをかけられ時計塔から出ることも許されないのです。

王女は独り淋しくその時計塔の中で魔王にかけられた呪いと共に長い時を過ごしました。

十数年が経ち、王女の呪いが解ける時が来ました。

塔の頂上にはこの時計塔の主の王女が住んでいます。

現れた魔王に王女は言いました。

「コレが俺に”強さ”を与えた魔王か」

王女は地面からおどろおどろしく出てくる筈だった魔王の頭を踏みつけました。

「え？ちょ、まッ」

「貴様のお陰で俺がどれほど苦労した事か…」

死神をも凍らす冷たい双眼を向けて軽やかに詠います。

「死んで詫びろ」

その笑顔はとても爽やかで美しいものでした。

…そう、十六年も魔王に呪われ、窮屈な塔に閉じ込められた王女様はそれはそれは立派にグレてしまったのでした。

## 登場人物（ネタバレ有り）

### 王女アリーシャ（アリー）

小麦色の髪に青い瞳。人類最強の王女（魔界に行けば力は普通）。欲しい物は何でも手に入ったが魔王のお陰で両親がSMプレイ（魔王の祝福を止めなかった国王に王妃がキレた）に目覚めてしまいグレた。なんか居たたまらない。自分以外の常識人を探している。魔界ではストレスで胃に穴が開きそうな今日この頃。

### 魔王デイルグレン（ディー、グレン）

艶やかな漆黒の髪で眼が緋色。冒頭ではシリアスに進めたが実は国王の古くからの友人でヘタレ。産まれてくる子供は男の子だと勝手に思い込みアリーに最強と言う祝福（呪い）を送った。常に偉そうだがそれがまた涙を誘う。執務が嫌いで2日に一回は地上に逃げ回ってくる。

## 王女の成長

私はこの日をどれほど待ち望んだ事か。

物心ついてすぐ自分が周りの人達とは違うと気付いた。

そして周りが私と他の子供を見る視線の違いにも。

私はどうしてか他の子供より力があつた。

だから私はある日お母様に理由を聞いた。

他の子供達との違いは何なのか、私を産んでくれたお母様なら知っておられるでしょう。

しかしその話題に触れたのは間違いだった。

お母様の手掛けた温室でカップの割れる耳障りな音。

白を通り越して青ざめた顔に翡翠色の瞳は零れんばかりに見開かれる。

呼び掛けようと口を開くと同時にお母様の瞳から溢れたのは一筋の涙だった。

私は一人その様子を眺めるしか、それしか出来なかった。

そんな出来事があつてから二回目の冬。

随分と憔悴された様子のお父様に私が他の人達と違う理由を聞かされた。

私がまだお母様のお腹にいた時の出来事を。

お父様はずっと泣きそうな、難しい顔でなにかおっしゃっているけれど私の頭の中は真っ白で話についていけなかった。

ただ一つだけ頭にのこった事は、魔王を倒せる人間は私…いや、俺

ただだと言つこと。

家族に深い傷を付けたそいつを決して許さないと誓いながら、俺は明日から暮らす事になる時計塔を見つめた。

四年が過ぎ。

俺は持て余した力を全て国の軍事力にあてた。

両親とも距離を置き、軍の指揮官に上り詰め、限りなく力を求めた。お父様が慈しんでくれた時間を捨て、お母様が愛してくれた長い髪も捨てた。

代わりに王に忠誠を誓い、王妃に俺付きだった侍女を献上した。

寂しそくに微笑む二人に俺は頭を垂れその場を後にした。

両親に笑いかける仕方などとうに忘れたから。

あの愚か者が俺の前に現れるまであとひと月を切った。

もはや住み慣れた時計塔の自室で俺は歪んだ笑みを口元にたたえ、  
宮廷魔導士に造らせた床の魔法陣を指でなぞる。

「早くおいで。俺の魔王」

“祝福”を与えた事、後悔させてやる。

## 王女の成長（後書き）

シ・リ・ア・ス！！  
にしてみた

でもそんなの食べちゃうよ（＾p＾）  
王女視点のパパママはとっても優しい感じなんだけどね、他視点で  
進むとぶっ壊れてんだよね？

長髪のキューティクルは特に手入れに時間がかかる！

アルフォンスは目を見開いていた。

上瞼と下瞼って何だっけ？と言っ位に。

この国の王女アリーシャの足元でボロ雑巾プラス恐慌状態の男。

17年前、我が娘に“祝福”を贈った、魔界の端から端を納める…  
…かの有名な魔王様である。

「もっと魔物っぽいのをイメージしてたんだが…。まあ良い、死ね」

鳶色の瞳には相も変わらず刃物のような鈍い輝きがある。

町行く人間にどちらが魔の王かと聞けば百人中百人がアリーシャだと答えるだろう。

「な何なのだ、お前は！私は１７年振りに親友の子に会いに来たというのに。……ええい！！足を退けよ！！」

やっと地面から全身を出せた魔王はブツブツと呟きながら衣服の汚れを払う。

一通り身を繕い終えムツとしかめた顔を戻した。  
次の瞬間、まだ不機嫌オーラを出しまくっていた彼の、自慢の黒髪が一房、地に落ちた。

「……………え」

「魔王とは親友の子を見る為だけにわざわざ地上に来るのか、馬鹿らしい。…まあ…親友とやらには悪いが………死ね！」

魔王の頬スレスレにあった片刃の剣が真横にずらさる。

だが決して剣が収められたのではない。

アリーシャの発した言葉の意味通り。

魔王の首を胴から地面へ転校させる為である。

魔王はなんとか剣の軌道を避けたが、なんかもう、…貴婦人が本性表した時のような悲鳴を上げた。

思わぬ攻撃に驚いたアリーシャは耳を塞ぐ。

「キヤアアア！？我が自慢のキューティクルがあああ！！」

間一髪で刃を避け…きれなかった、自慢のキューティクルが若干減  
少した、魔王は慌てふためく。

アリーシャは仕留められなかった事に隠すことなく舌打ちした。  
眉根を寄せ次の構えをする。

だが魔王の剩りにも情けない悲鳴に彼女の瞳が少し、ほんの少し揺  
れた。

「……………あんだ魔王よね」

「失礼だな、見れば分かるであろう！魔王！！仮にも王様だよ、私  
！！何この扱い！？平伏せ愚民共！！」

「……………そうか。ではやはり、シネ」

「ギヤアアアア！？最早語尾の“死ね”が感情すらこもってない  
片言に！！…ちょ、痛いッ、マジで、…助けてアルフォンスウウウ

「!!」

アルフォンスは目を見開いていた。

上瞼と下瞼って何だっけ?と言う位に。

我が娘の王女アリーシャの足元でボロ雑巾プラス恐慌状態の男。

17年前妻の腹にいた娘に“祝福”を贈った、魔界の端から端を納める…

…忘れもしない親友の魔王である。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5397z/>

---

素晴らしきこの世界

2011年12月28日01時49分発行